

グリム兄弟とペロー童話

— 口承と書承の狭間で —

高 木 昌 史

## 序

世界中で親しまれているグリム童話とペロー童話には、密接な、そしてやや複雑な関係があった。前者（正式題名『子供と家庭の童話集』Kinder- und Hausmärchen、以下 KHM とともに略記する）<sup>(1)</sup> を編纂したヤーコブ Jacob (1785–1863 年) とヴィルヘルム Wilhelm (1786–1859 年) のグリム兄弟 Brüder Grimm は、彼らの童話集を刊行する以前に、それまでに出版されていた世界各国の昔話を収集・研究していたが<sup>(2)</sup>、中でもイタリアの作家ジャンバッテスタ・バジレ Giambattista Basile (1575–1632 年) の『ペンタメローネ』Il Pentamerone (1637 年刊)<sup>(3)</sup> とフランスの作家シャルル・ペロー Charles Perrault (1628–1703 年) の童話集（後述）<sup>(4)</sup> は彼らにとって重要な模範となっていた。特にペローは、語り（口承）と書物（書承）の両経路で KHM に大きな影響を与えたために、格別に注目される。

従来、グリム童話とペロー童話の関係を論じた文献は、意外にも、あまり多くない<sup>(5)</sup>。それに鑑み、以下では、KHM 成立におけるペロー童話の意義を、口承と書承の両面から考察することにする。個々の物語研究というよりは、グリム兄弟とペロー童話の関わり全体の全体像を描くことが本稿の目的である。

### 1 ペロー童話集——書承

ペロー童話がグリム兄弟に及ぼした影響の中、初めに、書物経路のものを確認しておくことにしたい。1989 年に刊行された『グリム兄弟の蔵書』*Die Bibliothek der Brüder Grimm*<sup>(6)</sup> の目録によれば、兄弟は次のようなフラン

ス語原書を所有していたようだ。

- \* PERRAULT, Charles: Contes des Fées. Paris : Favre o. J. [Verlust]
- \* [PERRAULT, Charles: Henriette Julie de Castelnau de MURAT:] Contes des fées destinés à servir d’amusement et d’instruction aux enfans et aux jeunes gens. 1. Leipzig: Köhler 1796. [nicht nachweisbar]
- \* [PERRAULT, Charles:] Histoires ou contes du temps passé. Paris 1697. [Verlust]
- \* 「シャルル・ペロー『妖精物語』、パリ、ファーヴル社、出版年不詳」  
「紛失」
- \* 「シャルル・ペロー、アンリエット・ジュリー・ド・カステルノー・ド・ムラ『子供と若い女性の娯楽と教育のための妖精物語』、第一巻、ライプツィヒ、ケーラー社、1796年」 「実証不可能」
- \* 「シャルル・ペロー『過ぎ去りし昔の物語あるいは短編物語』、パリ、1697年」 「紛失」

要するに、ペロー作品の原書は、間接的にその存在が証明されてはいるものの、その実物はベルリン大学図書館にも、そしてドイツ国立図書館にも残されていないのである<sup>(7)</sup>。グリム童話とペロー童話の関わりがきわめて深いだけに、テキストのこの不在は残念でもあり、ある意味、謎でもある。様々な憶測を呼ぶが、グリム兄弟が頻繁に利用したために、逆に、方向不明になってしまった可能性もあり、あるいは、彼らが誰かに貸して戻ってこなかったことも考えられる。いずれにせよ、今日では想像の域を出ないが、ただ少な

くとも、KHMの「文献編」(=研究篇)には、ヴィルヘルムのペロー読解の記録が残されており(後述)、我々はそこからKHMとペロー童話の関係を窺うことはできる。ちなみに、ペロー童話の成立事情は少々複雑だが(完訳『ペロー童話集』新倉朗子訳、「解説」)、三冊目の本は、同題名の初版本と思われる。

## 2 ペロー童話集—口承

書承によるアプローチは、このように、「紛失」あるいは「実証不可能」の壁に突き当たる。一方、口承によるペロー童話の受容に関しては興味深い研究が知られている。

KHM編纂を計画した時、グリム兄弟は主にヘッセン地方の身近な人物たちから聞き書きを試みた。その際、ペロー童話を含むフランス系の貴重な昔話を彼らに伝えてくれた語り部の中に、カッセルの行政区長官を務めていたヨハネス・ハッセンプフルーク家の人たちがいた<sup>(8)</sup>。当家は、実は、その先祖がフランスのドフィネ地方(ローヌ河上流地域)からヘッセンに移住してきたユグノーの家系の出身であった。

16世紀、フランスではカトリックとプロテスタントが激しく対立してユグノー戦争が勃発し、20万人以上のカルヴァン派新教徒が難民としてオランダ、イギリス、ドイツ等に移住した。ドイツ中部のヘッセン地方では、カール方伯が三十年戦争で疲弊したこの地にユグノーの人々を受け入れ、国土の繁栄を図った。一方、グリム家でも、代々カルヴァン派の教育が行われていたため、両家はきわめて親しく交際し、グリムの妹はハッセンプフルーク家の人物と結婚している。当家では家庭内の日常会話が19世紀の末まで

フランス語で話されていたとも言われ<sup>(9)</sup>、娘マリー(1788-1856年)、ジャネット(1791-1860年)およびアマリエ(1800-1871年)から、グリム兄弟はフランス系の昔話を聞いた。レレケによると、マリーからは「赤ずきん」Rotkäppchen (KHM26) (第二ヴァージョン)、「いばら姫」Dornröschen (KHM50) 等、ジャネットから「赤ずきん」(第一ヴァージョン)、「長くつを履いた猫」(Der gestiefelte Kater (33a)、アマリエから「黄金の毛が三本ある鬼」Der Teufel mit den drei goldenen Haaren (KHM29)、また姉妹たちから「青髭」Blaubart (62a) 等を採集した<sup>(10)</sup>。

昔話というジャンルには、鳥のように自由に空間を飛び越えて移動する性格があり、従って、類話が多いことがその特徴の一つとして挙げられるが<sup>(11)</sup>、その具体例を、我々はこのように観察することができる。つまり、ペロー童話は、ハッセンプフルーク家の人々に運ばれて、フランスからドイツに渡り、そこに根付いたのである。そのお陰で、グリム兄弟は本来的には異国の昔話を、活きたかたちで、換言すれば、口承物語として採集できたのだった。但しそれらは、数世代を経て、すでに半ばドイツ的な風土の刻印を帯びていた可能性は否めず(『赤ずきん』等)、そこに口承文芸の難しさと面白さが同居している。

以上、書承と口承という二つの系統から、グリム兄弟のペロー童話受容を概観したが、そのより具体的な経緯を我々は、兄弟の著作、とりわけヴィルヘルムのKHM「原註」の「注釈篇」と「文献篇」に探ることができる。

### 3 KHMとペロー童話

グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』の成立史を略記すると次のようにな

る<sup>(12)</sup>。

\* エーレンベルク稿 1810年

\* 初版 第一巻 1812年 第二巻 1815年 「原註」各巻末尾

\* 第二版 1819年 全二巻（以後同じ） 第三巻「原註」（＝「注釈篇」）  
1822年刊

\* 第三版 1838年 第三巻「原註」（＝「注釈篇」）1856年刊（第四版  
1840年／第五版 1843年／第六版 1850年）

\* 第七版 1857年

## 1) エーレンベルク稿

KHM最初のメモ書きであるエーレンベルク稿<sup>(13)</sup>に採録されたペロー童話（あるいはその類話）は以下の通りである（括弧内は「初版」の題名）。

「姥皮」Allerlei Rauch（「千匹皮」）……ペロー「ろばの皮」Peau d'Ane

「兄と妹」Das Brüderchen und das Schwesterchen（「ヘンゼルとグレー  
テル」）……ペロー「親指小僧」Le Petit Poucet

「いばら姫」Dornröschen（同題名）……ペロー「眠れる森の美女」La  
Belle au Bois dormant

「ねずみ皮の王女」Prinzessin Mäusehaut（「千匹皮」）……ペロー「ろば  
の皮」

## 2) 初版

次に、初版<sup>(14)</sup>に採録され、第二版以後カットされたペロー童話（あるいはその類話）は次のようである（番号はH・レレケ編KHMテキストに拠

る)<sup>(15)</sup>。

33a 「長くつを履いた猫」 Der gestiefelte Kater

62a 「青髭」 Blaubart

73a 「人殺し城」 Das Mordschloß (注：「青髭」類話)

### 3) 第2版以後

最後に、第二版以降 KHM に収録されたペロー童話（あるいは類話）の一覧を掲げる。

KHM15 「ヘンゼルとグレーテル」 Hänsel und Gretel……ペロー 「親指小僧」

KHM21 「灰かぶり」 Aschenputtel……ペロー 「サンドリヨンあるいはガラスの靴」 Cendrillon ou la Petite Pantoufle de verre

KHM26 「赤ずきん」 Rotkäppchen……ペロー 「赤ずきん」 La Petit Chaperon rouge

KHM50 「いばら姫」 Dornröschen……ペロー 「眠れる森の美女」

KHM65 「千匹皮」 Allerleirauh……ペロー 「ろばの皮」

以上をまとめると、エーレンベルク稿から第二版以降に至るまで、ペロー童話に類話があるにも拘わらず、「ヘンゼルとグレーテル」、「灰かぶり」、「赤ずきん」、「いばら姫」、「千匹皮」は、題名の変更は別にして、一貫してグリム童話集にも収録されていることが分かる。その反面、初版に採録されたペロー童話の「長くつを履いた猫」、「青髭」およびその類話「人殺し城」は、第

二版以後カットされている。その理由については後に触れるが、その前に、KHMの「原註」を一覧しておきたい。

#### 4 KHM「原註」 — a「注釈篇」、b「文献篇」、c「類話対照表」

『子供と家庭の童話集』第三版第三卷「原註」の「文献篇」(=「研究篇」)の中で、ヴィルヘルムはペロー童話を分析・解説し、最後にKHMとペロー童話(およびバジールの『ペンタメローネ』)との類話対照表を作成している<sup>(16)</sup>。我々はそこからグリム兄弟のペロー観を覗き見ることができる。

##### a 「注釈篇」

KHMの「原註」は、初版、第二版第三卷、第三版第三卷の3段階にわたって執筆された。初版「注釈」から、ペロー童話に関係した箇所を抜粋・紹介すると次のようになる。

- \* 15 「ヘンゼルとグレーテル」……「[これは] 幾つかの『親指小僧』、とりわけフランスの小さな『親指小僧』と精確に関連している。」<sup>(17)</sup>
- \* 33a 「長くつを履いた猫」……「この昔話は最もよく知られ普及しているものの一つである。ペローはそれを彼の『長くつを履いた猫』の中で上手く物語ったが、バジールはイタリアの伝承からだいぶ逸脱している、『ペンタメローネ』II. 4. 『ガリュエゾ』。」<sup>(18)</sup>
- \* 62a 「青髭」……「ペローの『青髭』は彼の最も上手く物語られた昔話に属している。[……] フランスの伝承では女性に姉、アンがいる。[……] ドイツの物語では、少なくとも我々が聞いたものは、この部

分「[アン、アン姉さん、なにか来るのが見える?」]がまったく欠如している。それに対して、不安を抱いた女性が血のついた器を干し草の中に置く部分がある。なぜなら、干し草が血を吸い取るというのは、実際、民間信仰となっていたからである。」<sup>(19)</sup>

- \* 73a (75a ?) 「人殺し城」……「一種の『青髭』であるが、すでに知られている異なる結末である。[……] 全体はオランダ語から翻訳された。それを我々はある女性の口承から書きとめた。」<sup>(20)</sup>

次に、1822年の第三版第三巻「原註」から、ペロー関連のものを抜粋・引用する。

- \* KHM26「赤ずきん」……「マイン地方から[採集]。ペローでは「赤ずきん」、テークのロマン主義文学の活き活きした改作はそれに拠る。」<sup>(21)</sup>
- \* KHM50「いばら姫」……「ヘッセンから[採集]」[北欧神話との関連]。「『ペンタメローネ』(V.5.)では、それ[訳注:眠りを覚ますもの]は亜麻である。ペローでは「眠れる森の美女」。イタリアとフランスの伝承は両者とも、ドイツのものには欠けている結末があるが、それは[KHMでは]断片5番(悪い継母について)に現れている。注目すべきは、ペローのバジールからのきわめて重要な逸脱(バジールだけが、乳飲み子が眠っている母親の指から亜麻糸を吸い出すという、美しい特徴をとどめている)にもかかわらず、両者[ペローとバジール]は子供たちの名前では、『ペンタメローネ』の双子は太陽と月、ペローでは日と暁と呼ばれている限りで、一致している。」<sup>(22)</sup>

- \* KHM65「千匹皮」……「ヘッセンとパーダーボルンの物語に拠る」  
 [ドイツの四つの類話の紹介]。「この昔話は『灰かぶり』と幾つかの  
 点で類似している。ペローの『ろばの皮』もこれに属する。またスト  
 ラパローラ (I.4.) のドラリーチェの昔話、特にその冒頭もそうである。  
 『ペンタメローネ』では「雌熊」(II.6)。」<sup>(23)</sup>

初版「注釈」の中では、『長くつを履いた猫』が「最もよく知られ普及して  
 いる」昔話であること、『青髭』に関しては、フランス版とドイツ版の相違点  
 が指摘されている。この二篇は第二版から削除されたのだが、その理由をこ  
 こで考えてみたい。H・レレケの注釈<sup>(24)</sup>では、「長くつを履いた猫」と「青  
 髭」は、ペローのテキストと殆ど同一であるために以後、カットされたとき  
 される。恐らくそれに違いないのだが、「青髭」と「人殺し城」については、も  
 う一つの理由として、グリム兄弟が、子供への影響も考慮して、残酷な内  
 容のものを数篇削除し、KHM全体のバランスを保ったとも考えられるので  
 はあるまいか。KHM40「盗賊のお婿さん」Der Räuberbräutigamのような、  
 残酷でエロティックな場面を含むが、昔話というジャンルにとっては重要な  
 作品を収録し、初版収録の「子供たちが屠殺ごっこをした話」Wie Kinder  
 Schlachtens mit einander gespielt haben (22a) や「青髭」系の物語はカッ  
 トして、ショッキングな内容の話の絶対数を減らした、と。

一方、グリム兄弟は、ペロー童話との類似性が明白であるにも拘わらず、  
 第二版以降も、「赤ずきん」、「いばら姫」、「千匹皮」は最終第七版までKHM  
 に収録している。察するに、その理由は次のようなものではあるまいか。

まず「赤ずきん」。テキストから明白なように、ドイツ版には猟師による  
 赤頭巾と祖母の（狼の腹の中からの）救出場面が描かれ、さらにもう一つ、

賢く狼を撃退する主人公の話が付加されて<sup>(25)</sup>、狼に飲み込まれて物語が終わるペロー版との差異化が明白である。ペローの場合は、「教訓」*Moralité*が恐怖からの浄化作用（カタルシス）を行っていると言えるかも知れない。

次に「いばら姫」。「文献篇」で指摘されているバジールとペローの類話とは異なって、グリム版では、細部の相違点は措くが、前二者の後半部分——主人公と人食いの王太后との確執——がカットされ、物語は、百年の眠りの呪いが解けて、王子が城に入り、主人公の目を覚まして、二人が結婚式を挙げ、ハッピーエンドとなる。まったくの新バージョンである。

最後に「千匹皮」。ペローの「ろばの皮」とKHMの「千匹皮」物語は、大筋では同じであるものの、細部は明らかに異なっている。娘と結婚しようとする父親＝近親相姦モチーフの起源は古く<sup>(26)</sup>、ヨーロッパ中にその類話が存在し、ドイツだけでも数種類を数えるが、とりわけモチーフの処理方法に、ペローとグリム両者の特性の相違が窺われて興味深い。グリムの初版がカール・ネールリヒの小説『シリー』を、第二版以後は、その後ドルトヒエン・ヴィルトから聞いた口承物語をそれぞれ典拠としていることは、すでに知られている。初版所収の類話「ネズミの皮の王女」は、ちなみに、ペローとの類似性ゆえに、第二版からは削除された<sup>(27)</sup>。

## b 「文献篇」

『子供と家庭の童話集』第三版第三巻の「原註」には、「文献編」*Literatur*と題されたヴィルヘルムの「研究ノート」が収録されている（レクラム版KHM第三巻）<sup>(28)</sup>。その中の「シャルル・ペロー」の項は、グリムのペロー童話研究のいわば集大成である。その箇所を引用してみたい。

「本格的な昔話の収集は、17世紀の末、それゆえイタリアの後に、フランスでようやく始まる。その頃、昔話への大いなる愛好が現れた」<sup>(29)</sup>。

[……]

「フランスの昔話とイタリアおよびドイツのそれとの類似性、と同時に『千夜一夜物語』からのそれらの独立性は、[……] その内容が口承から採集されたことを反論の余地なく示している」<sup>(30)</sup>。

「物語の [アラビアからの] 借用説はすべて根拠がない。その上、偶然、外部からの論証もある。スカロン (1610 生まれ、1660 年没) は恐らくすでにペロー (1633 年生まれ、1703 年没) 以前に、『滑稽物語』 *Le roman comique* (パリ、1651 年) の中で、「ろばの皮」*Peau d'âne* のことを想起しているのである。」<sup>(31)</sup>。

「ペローは昔話を純粹に受け取り、細かな点は別として、何も付け加えはしなかった。文体は簡潔かつ自然であり、当時すでに滑らかで洗練されていた書き言葉が許す範囲で、子供の口調を適切に表現した。個々の上手い表現は恐らく保持されている。例えば、彼女は〈大地が彼女を運んでくれる限り〉 *tant que la terre put la porter* 歩いていった。彼は〈そこから一万二千里のところから〉 *de douze mille lieues de là* やって来る。あるいは、「私は肉を食べよう」 *je vais manger ma viande*。また「青髭」における問答は、確かにまだ口承に由来している。〈アン、アン姉さん、なにか来るのが見える?〉 *Anne, ma sœur Anne, ne vois tu rien venir?* 〈なにも。私に見えるのは、きらきらした太陽と青々した草だけよ〉 *Je ne vois rien que le soleil qui poudroie, et l'herbe qui verdoie*。疑いもなくこういった美点のお陰

で、この書物は我々の時代まで存続しているのである」<sup>(32)</sup>。

最後の「青髭」の場面はこうである。死体を吊るした禁断の部屋を覗いたことが発覚し、青髭にいよいよ殺されそうになった妻は、「神さまにお祈りする時間」を願い、「十五分の半分」の猶予の間に、姉を呼び、塔の上から彼女たちの兄が救援に来てくれないか見張ってもらう。引用はその時の姉妹の間答である。青髭が剣を振りかざしてあわやという瞬間、騎士である二人の兄が扉を開け、妻は助かる<sup>(33)</sup>。

以上、「文献篇」のペロー論は、翻って、グリム自身の童話集の性格を考える上にも非常に重要である。ペローは昔話を「純粋に受け取り」*rein aufgefaßt*、「何も付け加えはしなかった」*nichts zugesetzt*というグリムの見解は、KHM「序文」*Vorrede*の中の次の文章を想起させる。「私たちが収集した方法に関しては、何よりも忠実さと真実さが肝要であった。私たちは自身のやり方から何も付け加えはしなかった」<sup>(34)</sup>。

同じ「序文」の中で、グリムは伝承の「学問的な価値」*der wissenschaftliche Wert*<sup>(35)</sup>について語りながら、こうも述べている。「伝承されたものに対する忠誠さは、同じ生活様式で変わることなく生き続ける人々においては、変化に傾きがちな私たちが考える以上に強いのである」<sup>(36)</sup>。この根本認識あるいは信念から、グリムは伝承文学、とりわけ口承文芸に深く関わったのである。

ところで、グリムはペロー童話が卓越している理由として、引用に見るように、文体が「簡潔かつ自然」*einfach und natürlich*で、「子供の口調を適切に表現した」*der Kinderton getroffen*点を挙げる。但しそれは、と付言する、「滑らかで洗練された書き言葉が許す範囲」であるが、と。この一言も重要である。

ドイツ・ロマン派の時代、J・G・ヘルダーの『歌謡における諸民族の声』<sup>(37)</sup> やアルニム／ブレンターノ編『少年の魔法の角笛』<sup>(38)</sup> によって親しまれていた民謡あるいは物語詩（バラッド）の素朴で懐かしい口調と息吹を、「青髭」の中の姉妹の会話は確かに感じさせる。KHMの中に時折挿入されるリズムミカルな詩に近い性格を、グリムはペロー童話の随所に見出していたのである。『ヘンゼルとグレーテル』から引用してみよう。両親によって森の中に遺棄されたヘンゼルとグレーテルは、小鳥に導かれてお菓子の家を発見し、空腹のあまり無我夢中でそれにかじりつく。

「その時、部屋の中から呼ぶ声がしました。

〈カリカリ、カリカリ、ポリポリ、

私の家をかじるのは誰？〉

子どもたちは答えました、

〈風だ、風だ、

天の子だい〉

そして迷うことなく、食べ続けました。」

Da rief eine Stimme aus der Stube heraus:

>Knuper, knuper, kneischen,

Wer knupert an meinem Häuschen?<

Die Kinder antworteten:

>Der Wind, der Wind,

Das himmlische Kind<,

und aßen weiter, ohne sich irremachen zu lassen.<sup>(39)</sup>

子供たちが置かれた状況の深刻さ（遺棄）と軽やかでリズムカルな描写（詩）の対比が見事な一節だが、昔話のジャンル論的な本質は、ある意味そこに集約されているとも言える。すなわち、現実の過酷さ（子供の遺棄、飢餓、殺人、等々）と表現の夢想性（生々しさの浄化、透明化、等）との相反する力学的均衡の上に、メルヘンの世界が構築されるものだとしたら（M・リューティ）<sup>(40)</sup>、グリムが引用したペロー「青髭」の場面、そして我々がここに見るグリムの「ヘンゼルとグレーテル」のシーンは、その最たる例であろう。

KHM 編纂の際に、グリム自身が当面した文体の問題の核心は、恐らくここにあったと思われる。フランス古典主義の作家シャルル・ペローは、ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿で王侯貴族の子女を相手に、魅力ある昔話を語り、最後をしばしば「教訓」*Moralité* で締めくくったが、彼が創出した様式、言葉の洗練と自然らしさが高度に調和する文体をグリムがどのように分析・研究したか、その様子的一端を、KHM「原註」の「文献篇」は明かしている。

### c 「類話対照表」

KHM「文献篇」の末尾に、グリムは類話対照表を掲げている。関係する番号の部分以下引用する<sup>(41)</sup>。

- 1 「白い女」（「仙女たち」*Le fées*）。『ペンタメローネ』三-10 [「三人の妖精」と四-7 [「二つのケーキ」、我々のもの [KHM] では13番 [「森の中の三人の小人」と24番 [「ホレおばさん」]。フランスのものが最も不完全である。
- 2 「眠れる森の美女」(*La belle au bois dormant*)。『ペンタメローネ』

「日と月とターリア」五-5、我々のものでは「いばら姫」50番。

- 3 「青髭」(La barbe bleue)。ドイツでは46番「フィッチャーの鳥」だが、かなり異なる。イタリアには類似のものはない。
- 4 「赤ずきん」(Le chaperon rouge)。ドイツでは26番[[「赤ずきん」]]。
- 5 「長くつを履いた猫」(Le chat botté)。『ペントメローネ』[「ガリューゾ」二-4、ストラパローラ十一-1。断片4番[214]]。
- 6 「灰かぶり」(Cendrillon)。『ペントメローネ』一-6[[「灰かぶり猫」]]およびドイツ21番[[「灰かぶり」]]よりも表面的。悪い姉妹たちが、靴を履くことができるように、足を無理に短くすることで、一瞬、王子を騙すが、鳩に秘密を漏らされるという箇所が、フランスのものにはまったく欠如しているのはきわめて意味深い。

[7は省略]

- 8 「親指小僧」(Le petit poucet)。大部分は15番「ヘンゼル[とグレーテル]」のドイツの昔話である。『ペントメローネ』では五-8[[「ニッコロとネッネッラ」]]。親指小僧自身は、ここではドイツの二つの昔話、37番[[「親指小僧」]]と45番[[「親指小僧の旅歩き」]]ほど特徴的ではない。

これら八篇をペローが初めて(?)、1697年の12月にパリで、『フェアブリーオー』から借用した元の題名『がちょうお婆さんの物語』Contes de ma mère l'oye および第二版『過ぎ去りし昔の物語』Histoires et contes du temps passéのもとに出版したのだろうか。続く版ではさらに三篇が追加された。

- 9 「ろばの皮」(Peau d'ane)。『ペンタメローネ』『牝熊』(二-6)、ドイツでは「千匹皮」(65 番)。

[10 は省略]

- 11 「愚かな願いごと」(Les souhaits ridicules)。韻文。ドイツの「貧乏人と金持ち」(87 番)の昔話の最後の部分を含む。

バジールの『ペンタメローネ』、ペロー童話集、そして KHM それぞれに収録された昔話を比較・検討しながら、グリムはこうして類話対照表を作成しているのだが、ちなみに、「文献篇」の他の個所(バジール、『ゲスタ・ロマノールム』、オーノワ夫人等)でも同様の試みをしている<sup>(42)</sup>。

以上の類話対照表は、グリム以後、口承文芸研究の礎を築く結果となった。すなわち、J・ボルテとG・ポリフカ編『グリム兄弟 KHM 注釈』全五巻<sup>(43)</sup>、A・アールネの『昔話のタイプ』<sup>(44)</sup>、それを増補改訂したA・アールネ/S・トンプソンの『昔話のタイプ』一覧<sup>(45)</sup>、そして現在刊行中の『昔話百科事典』(EM)<sup>(46)</sup>等々は、KHM「文献篇」を土台に次々に刊行された。グリムのペロー童話との出会いが、いかに歴史的な出来事であったかが今更のように分かるのである。

## 結 語

以上見るように、グリム兄弟のペロー童話との出会いは、フランス語の書物(書承)とユグノー系の人々(ハッセンプフルーク家、等)の語り(口承)の両面からのものであったが、それは恐らくグリム兄弟にとってきわめて幸運なことであった。なぜなら、昔話というジャンルは、本来、人の口から口

へ伝わった活きた文学——ユグノー系の人々の功績は大きい——であるからだ。しかし同時に、活字文化が隆盛になった近代以降、口承の伝統は次第に、ある場合は急速に失われ、消滅の危険に晒された。そのため、歴史の波間に消え去る前に、それを記録し編集する人物、しかもジャンル（昔話）の自然状態を出来るだけ保存しながら、読者の心を捉える豊かな表現力を備えたペンの持ち主が不可欠になった。そうした歴史的状況の中で、『子供と家庭の童話集』を企図したグリム兄弟は、隣国の模範、ペロー童話に、幸運にも、書承と口承の両面から接する機会を得た。KHMの成立がペローに負うところは計り知れない。

## 註

### (1) KHM テキスト

\*Brüder Grimm:Kinder- und Hausmärchen,Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, hrsg. von Heinz Rölleke,Philipp Reclam jun., Stuttgart, Bd.1-2, 1982, Bd.3, 1983. (Reclam)

\*Kinder- und Hausmärchen,gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837), hrsg. von Heinz Rölleke, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a. M. 1985. (BDK)

\*Brüder Grimm:Kinder- und Hausmärchen ,hrsg. von Hans-Jörg Uther in 4Bänden, Eugen Diederichs Verlag, München, 1996. (Uther)

なお、ペローに関しては『完訳ペロー童話集』新倉朗子訳、岩波文庫、2006（1982）年の邦訳と「解説」、グリムについては『完訳グリム童話集』全五冊、金田鬼一訳、岩波文庫 2007（197）年を参照させていただいた。

### (2) マックス・リュートイ『メルヘンへの誘い』、高木昌史訳、法政大学出版局、2010（1997）年、「解説」参照。

- (3) 『グリム兄弟メルヘン論集』、高木昌史／高木万里子編訳、法政大学出版局、2008年、IV世界の昔話、および「解説」参照。
- (4) 前掲書。
- (5) 詳しくは、Enzyklopädie des Märchens, Begründet von Kurt Ranke, Bd.10, Walter de Gruyter, Berlin・New York, 2002. (Jack Zipes: Perrault, Charles, S. 746-753) 参照。
- (6) Die Bibliothek der Brüder Grimm, erarbeitet von Ludwig Denecke und Irmgard Teitge, hrsg. von Friedrich Krause, S. Hirzel, Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft, Stuttgart, 1989, S.143.
- (7) a. a. O., Einführung.
- (8) 詳しくは、高木昌史「グリム童話における語りの風土」(『成城大学民俗学研究所紀要』第29集、平成17年3月所収) 参照。
- (9) Heinz Rölleke, Wo das Wünschen noch geholfen hat. Gesammelte Aufsätze zu den >Kinder- und Hausmärchen< der Brüder Grimm, Bouvier Verlag, Bonn, 1985, S.52.
- (10) Reclam, Bd.3, S.562f.
- (11) 『グリム兄弟メルヘン論集』II「本質論」2「伝説の本質」参照。
- (12) 詳しくは、高木昌史『グリム童話を読む事典』、三交社、2002年第三部「資料集」参照。
- (13) Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm, Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1801 und der Erstdruck von 1812, hrsg. von Heinz Rölleke, Fondation Martin Bodmer, Cologny-Genève, 1975.  
邦訳、小沢俊夫「ヤーコプ・グリム『エーレンベルク稿』」(『グリム兄弟』「ドイツ・ロマン派全集」15、国書刊行会、1989年所収)。
- (14) Kinder- und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815. Transkriptionen und Kommentare in Verbindung mit Ulrike Manquardt von Heinz Rölleke, 2Bde. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1996.
- (15) BDK版。
- (16) Reclam, Bd.3, S.300-302.
- (17) 註(8) S. IX.

- (18) a. a. O., S. XXIII-XXIV.
- (19) a. a. O., S. XLI.
- (20) a. a. O., S. XLVIII.
- (21) BDK, S. 908.
- (22) a. a. O., S. 945..
- (23) a. a. O., S. 975-976..
- (24) a. a. O., S. 1280f.
- (25) a. a. O., S. 133-137.
- (26) Enzyklopädie des Märchens (註 5), Bd. 7, 1993. (Ion Talos: Inzest, S. 229-241)
- (27) BDK, S. 1282.
- (28) Reclam, Bd. 3.
- (29) a. a. O., S. 299.
- (30) a. a. O., S. 300.
- (31) a. a. O., S. 300.
- (32) a. a. O., S. 300.
- (33) 『完全ペロー童話集』 181-191 頁。
- (34) BDK, S. 18.
- (35) a. a. O., S. 18.
- (36) a. a. O., S. 16f.
- (37) Johann Gottfried Herder, Stimmen der Völker in Liedern, 1778f. (Volkslieder, II)
- (38) A. v. Arnim / C. Brentano, Des Knaben Wunderhorn, III, 1806-08.
- (39) Uther, Bd. 1, S. 86.
- (40) M・リユーティ著『ヨーロッパの昔話』小沢俊夫訳、岩崎美術社、1982(69)年。
- (41) Reclam, Bd. 3, S. 300-302. なお、ペローのテキストは次を参照した。
- \* Charles Perrault, Histoires ou contes du temps passé, avec des moralités, Lecture accompagnée par Evelyne Messière, certifiée de lettres modernes professeur en college a Vauréal, La bibliothèque Gallimard, 1999.
- \* Charles Perrault, Contes. Édition présentée et annotée par Nathalie Froloff. Texte établi par Jean Pierre Collinet, Gallimard, 1999.

- (42) Reclam, Bd.3., a. a. O., Basile :S. 293f., Gesta Romanorum:294-299, Aulnoy:303-306.
- (43) Johannes Bolte und Georg Polivka,Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm,5Bde.,Leipzig,1913-1932, Neudruck, Georg Olms Verlag, Hildesheim/New York, 1982 (4Bde.).
- (44) Antti Aarne,Verzeichnis der Märchentypen,1910. (FFC3)
- (45) Antti Aarne and Stith Thompson, The Types of the Folktale, Helsinki, 1987. (1961 Second Revision)
- (46) 註(5)、現在第13巻(2010)まで刊行中。

\*本稿は「グローバル研究」プロジェクトの平成22年度研究成果として発表するものである。